

## 様々なバックグラウンドを持つ子どもたちとアーティストとの出会い～ダンス・ワークショップの可能性～

堤 康彦 (NPO 法人 芸術家と子どもたち)

### 1) 団体概要

1999年創立、2001年NPO法人化した当団体は、多様な価値観・考え方・身体感覚を持つ人々が共生する社会を創出するため、子どもたちとアーティストの出会いを通じて、創造的な学び・遊びの機会をつくり、子どもたちの育ちに寄与する活動を行っている。近年では、子どもの成長過程における虐待や貧困の連鎖を減らし、すべての子どもたちが将来に希望をもって歩みだせる社会へと変化させていくことを一つの主題としている。主たる活動である ASIAS (エイジアス: Artist's Studio In A School) は、公立小中学校、幼稚園、保育園、特別支援学校、児童養護施設、障害児入所施設、子どもの居場所等へアーティストを派遣しワークショップをする活動で、2000年～2022年3月までに1,252校・園・施設にて実施。約51,000人の子どもが参加した。行政(文化庁、東京都、豊島区、港区等)、企業等との協働により実施している。

### 2) 子どもを取り巻く社会状況

現代日本社会の変化(都市化、情報化、核家族化等)、そして20年を超える経済不況に伴う様々な影響・しわ寄せが弱い立場にある子どもに及んでいる。子どもの貧困率は2018年には13.5%(厚生労働省2019年調査)で、7人に1人の子どもが貧困状態にあるとされた。また、児童相談所における児童虐待に関する相談対応件数も増加を続けている。児童虐待を受けた児童の保護者の状況は、単身・低学歴・低所得に加え社会的孤立が特徴で子育て家庭の孤立防止が社会的課題となっている。さらに親の経済的貧困が子どもから学習や文化的体験の機会を奪い、教育機会に恵まれなかった子

どもが低学力・低学歴となり所得の低い職につかざるを得なくなるような貧困の連鎖が生じている。一方、発達障害(LD・ADHD・自閉スペクトラム症等)の子どもが障害の認知度が上がったこともあり顕在化し、通常級でその可能性のある児童生徒の在籍率が6.5%程度(文部科学省2012年調査)と言われたり、特別支援学級の児童生徒が年々増加したりしている。また、児童養護施設では何らかの障害のある児童が37%、虐待経験のある児童が66%(厚生労働省2018年調査)と高い割合である。

### 3) アーティスト・ワークショップの効用

不適切な養育環境で育ったり被虐待経験のある子どもは、自尊感情や自己肯定感が低く、自己表現を抑圧してしまう傾向が強い。そして成功体験や認められた経験が少なく、他者との関係に否定的イメージを持ちやすく、様々な行動上の問題を引き起こしてしまいがちである。自分の居場所や時間を喪失していると言ってもいいだろう。また、場合によっては発達障害傾向の子どもも、その一見見えにくい障害特性ゆえに類似の生きづらさを感じることがあるかもしれない。そんな子どもたちにアーティストは寄り添い、ワークショップを通じて彼らのちょっとした表現やつぶやき、変化を拾い肯定し面白がり褒める。ものの見方をずらし、既成概念に疑いを持って独自の表現方法を追求するアーティストだからこそ、学校の先生や施設職員とは異なる視点で子どもを見ることが出来る。そして子どもにとってワークショップの時間は、安心して自分を出せ自分らしく居られる特別な時間となっていく。ワークショップでは他の仲間と身体を動かしながら、ときには試行錯誤を繰り返し、他者と一緒に表現や創作を試みる。先生でも職員でもないナナメの関係にある大人としてのアーティストも含め、様々な他者との関係づくりを経験することになる。

### 4) ダンス・ワークショップの可能性

音楽、美術、演劇などどんな表現ジャンルでも身

体は欠かすことのできない主題であると思うが、言うまでもなくダンスは直接的に身体を扱う根源的な表現である。このことが子どものワークショップにおいても重要な意味を持つ。言葉のコミュニケーションが苦手な子どもは多いが、ダンス・ワークショップでは言葉による意味ではなく、身体的な感覚による他者とのコミュニケーションを積み重ねる。簡単なルールに基づいて即興的に動くペアワークやグループワークでは、他者を尊重しながら自分の動きを相手に返していくやり取りを続ける楽しさを味わえる。自然の中で身体を動かして遊ぶ機会が減り、ゲームやスマホに依存しがちな今の子どもには、このようなワークショップは貴重な体験であるし、身体感覚を共有することは、他者との関係づくりの基礎となる。